

河川敷すっぽんぽんセックス

俺の住む町は片田舎ではあるが、それなりに何でもそろっている。

牧歌的な穏やかな雰囲気があるが遊ぶ場所もないわけではない。何にも困らない便利な街だ。そのくせ近くの山々が自然、緑を街に与えてくれている最高の街だ。

この日は買い物をしようと近くのショッピングセンターに来ていた。

実は新しい大きな会社のショッピングモールが近々出来る予定で、その規模はまるで違う。おそらく吸収されて潰れてしまいそうな小さな古きよきショッピングセンターだ。小さい頃からここで育った俺は、愛着も強くとても好きな街である。学生時代こそ街方面へ出ていたのだが、ここ数年戻ってきた。

俺はフリーターをしている。昔からゲームが好きで、最近の“好きなことを仕事にする”という流れに乗って、どうにかお金に出来ないかと模索しながらパートの仕事をしている毎日だ。

軽自動車です。30分。店に向かい、立体駐車場を上がっていると大きな音がした。

「ガシャンッッッ！！！！ガッ！！ガッ！！ガッシャーッッッッッ！！！！」

コンクリートの駐車場の上り坂を走っている途中だった。とても大きな音だったのでさすがに驚き、自動車を上がってすぐの場所に止めた後、音のした方に駆け寄る。小さめの商業トラックと赤い乗用車の前の部分がペしゃんこに潰れていた。やじ馬たちが集まってきている。

「びっくりしましたね」

俺はとっさに近くにいた胸の大きな女性に声をかける。

「事故って久しぶりに見ましたわ」

女性の額にはうっすらと汗。今は蒸し暑い夏であるため俺も同様自然と汗ばんでいる。とても綺麗で清楚な淑女だ。

「大丈夫ですかね？運転手さん・・・・・・・・」

「半端な音じゃなかったですからね」

「こんな駐車場をスピード速めて走っていたのかしら？？信じられないわ」

「大変なことになったもんですよ・・・・・・・・」

周りは事故の衝撃でか奇妙な静寂に包まれている。

「どこから来られたんですか？」

「私ですか？ここのすぐ近くのマンションです。ちょっと食料を買いに・・・・・・・・」

「事故は確か最後に見たのは・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・。

少し話していると話が合った。

「ふふふっ・・・・・・・・そうねえ、そんなことも確かにあるかも・・・・・・・・」

女性の笑顔はとても愛嬌があり、気持ちが穏やかになる。

「・・・・・・・・でしょっ？？そういうのってあるんですよきっと・・・・・・・・」

お互い時間があるということが分かったので俺たちはカフェでも行こうということになった。

「胸・・・・・・・・大きいですね」

俺は目を見開き女性の胸元に目をやる。

女性の名前はミサコさん。37歳で、一人の小さな子持ちの主婦だ。

「子供が出来てから大きくなったんですよ」目を細めミサコさんは呟く。

「俺も股間についてるペニス、子供が出来たら大きくなるかな」

ミサコさんは微笑んだ。

「それはそれは、セックスすると男性も大きく成長するかもしれませんわよ・・・・・・・・ふふふっ」

「・・・・・・・・・・なんだか恥ずかしいなあ・・・・・・・・」

「ビンビンにはち切れそうに勃起して女性に愛されるんですから……
ふふふっ」

ミサコさんの顔は赤らんで、体は火照っている様子だった。

俺の股間は膨らむ。会話をしているだけで出てしまいそうだった。

ミサコさんの、フェロモンなのかなにかは分からないが、発する何かの
エキスが俺をまとう。

服装は白い小さな絵柄が右胸にプリントされたTシャツにデニムパン
ツ。

むっちむちの足と太ももがはっきりと浮き彫りにされている。

会話しているだけでセックスをしているようなそんな感覚。

「こんないい天気だし、近くの河原へ行きませんか？」

「外っていいかもしれないわね……ふふっ」

俺たちは互いの車で近くの河原へ直行した。

ミサコさんのマンションが途中で見えた。通り過ぎ、20分ほど走って
幅の広く公園などがある河川敷へ。

鳩が大量に舞って餌を求めてくるような場所。以前一人でも散歩に来た
ことがあった。

河原へ到着すると、ミサコさんは両手を上げて背筋を目いっぱい伸ばす。

「なんて清々しい日なの！！」

照り付ける直射日光。少し熱いけれど最高の日よりだ。

空は薄い水色。ちらほらとちぎれたような雲が漂っている。

近くはそれなりに人が通る。遠くに山が見える。川のせせらぎは綺麗で
川幅も広い。

対岸に公園があり、子供たちが遊具で遊んでいる。

俺たちは歩行者から完全に四角になる岩場を発見した。

「あの裏なら誰からも見えませんか？」

「そうねえ」

「たっぷりミサコさんのおっぱい舐めれますよね??」

「ええっ!!?そんなエッチなこと考えているの??？」

「えっ!!?そうじゃないんですか??」

俺は目を細めた。

「確かに・・・・・・・・私もしたいけど・・・・・・・・」
河川敷の鉄の椅子、左側に座ったミサコさんは少し太ももを開いた。
「旦那さんには内緒で・・・・・・・・ねっっ!!!」
俺はミサコさんの手を引っ張る。

————— 体験版はここまでです。—————